

「対話と実行」座談会（H20.11.22(土) 四万十町）の概要

知事あいさつ

高知県の財政（平成20年度）のパンフレット、「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」及び「産業振興計画 中間取りまとめ」（以下のURL参照）を基に説明。

(<http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf>

<http://www.kochinet.ed.jp/kinnyuupurangaiyou.pdf>

<http://www.pref.kochi.jp/~seisui/keikaku/cstori.pdf>)

座談会

【ネットワークづくり、使いやすい補助金】

Aさん：大正の森林組合のAといいます。山で働く一人の意見だと思って聞いていただきたい。私が働いている森林組合は、集成材工場といって、間伐材を主に使った板の加工をしている工場である。売り先としては、県外が約80%、県内とその他で約20%という比率で販売している。今やっているプロジェクトとしては、文具メーカーのコクヨさんとやらせていただいている「結の森」の事業や家具の事業、他県の公共事業への間伐材の利用の促進の事業などがある。今、知事が言われたように、私たちが県外からお金を持ってくることを主体に考えて営業を展開している。県内でいくらお金を回しても豊かになることはないので、県外から、少しでも県内にお金を入れてもらえることを考えている。コクヨさんの事業としては、今まで机などはスチール製品を買われていたと思うが、できるだけ間伐材を使って作ってもらうことで、CO₂の削減や環境問題への対応ということでやっている。この環境事業は、ちょうど今追い風になっていると思う。できればこれを、私どもの会社だけで回すのではなくて、高知県全体の方々と協力しあって進めていきたいと思っている。県への要望としては、ネットワークづくりの仲介役といったものになってもらえたら、これからどんどん発展していける事業がたくさんあると思うので、やっていただきたいのと、補助金についてもいろいろな補助金の使い方ができればなと思う。例えば、集成材を用いているいろいろな商品を開発したいと思っているが、なかなか適当に使える補助金がなくて、商品の開発にすぐには乗出せない部分もあったり、商品の一つ選定して補助するという形だと、それが絶対に成功するということはいえないので、なるべく広い分野の商品開発への補助ができないかと思っている。また、産学官で、大学などと協力してやっていきたいと思っている。先ほど知事の考えを聞かせていただいたが、その意見にはすごく賛成で、私も営業で県外に出ることがあって思うことは、教育や外貨の獲得について、他の県はすごく力を入れている。その辺りは高知県が一番になれるように頑張っていければなと思っている。

知事：コクヨさんと一緒になった事業などは、素晴らしいと思う。今、環境がキーワードになっているので、これを活かして、高知県の木などを活かせる最終商品需要をいかに掘り起こしていくか、これは本当に大きな仕事だと思う。実は、県にも反省するところがあって、公共施設での県産材の使用率が、今まで全国平均よりも低かった。森林県なのにこれではいけないということで、県産材利用促進本部というものを作って、全国平均くらいにまでなっているが、よ

り一層使っていくように努力したいと思う。

ネットワークづくりというのは、生産者の方と、商品を作られる方、販売をされる方、こういう方々のネットワークづくりということですか。

Aさん：同じ業種で固まっても、同じ意見しか出ないが、例えば、私たちが取り組ませていただいているのは、サニーマートさんや、フタガミさんなど、販売のところもあるし、また、鉄工所であったり、異業種の方との付き合いを大事にしている。商売では、異業種の方と付き合うことが一番大事なのではないかと思うので、そういう方とネットワークを持てるような会があればと思う。今はいろいろ県の方がやってくださっているものを活用させていただいているが、会に出ると、お互いの会社のものを組み合わせてこんな商品ができないかといった未知な発想が出てきたりする。同じ物を作っても売れないので、何か変わった物、おもしろい物を作っていきたいと思っている。

知事：マッチングですね。そして、インターネットを使ってそういうことができないかといったことも含めて、そのお話は本当に重要だと思うので、やっていきたいと思う。食品加工などでも、材料は高知のものだが、加工を外でやるということが、すごく高知は多い。それを何とかしたいと思っている。

補助金の方についても考えてみたいと思う。林業関係の補助金は使いづらいと、県内5か所くらいで怒られている。国の制度が元々複雑だということもあって、国の方にも変わってもらわないといけないところがあるが、我々でもできるところは修正していきたいと思っている。

【シイタケ産業の振興】

Bさん：シイタケ栽培を始めて4年が経過した。私は元々は林業が専門で、国有林関係の仕事を請負事業でずっとやってきた。昭和58年から60年にかけて、クヌギ造林が大変奨励されたときにクヌギを植えていて、それがシイタケの原木として適齢期にもなったし、引退してシイタケを始めようという気になっていた。そのときに、旧十和村が立案されたシイタケ振興計画に参加して、栽培を始めた。私はすべてJAさんに出荷しているが、平成18年の収入金額は40万円、19年は120万、20年は250万円になった。JA十和支所管内に100数名のシイタケ生産者がいるそうだが、その人たちの平均が私くらいになるように生産力を上げていければ、2億5千万円になる。それでも小さいので、この四万十川という非常に有名なブランドを使い、四万十シイタケとして、四万十流域全体を取りまとめて、知事さんの強力なリーダーシップでシイタケ生産体制を作れば相当な金額になると思う。高知県での生産可能数量として、原木の伐採可能面積が6,000ヘクタールあると言われているので、これを活用しない手はないと思う。私の今後の目標は1年間で365万円、1日1万円である。シイタケ産業は年寄りの仕事として非常に適している。というのは、農薬がいない、肥料がいない、全く無農薬、無肥料で、種コマを打ち込んで、ほだ場に入れていたら大体生えるし、原木の供給体制を整えれば、お年寄りの方でも十分できる。高知県は非常な老人県と知事さんがおっしゃったが、老人のパワーを活用しない手はない。老人が働く意欲を持って働ければ、非常に健康にもいい。それと、シイタケの原木山は20年くらいで伐採して活用するので、森林の新陳代謝を回り、森林を若返ら

せ、CO₂の吸収も旺盛になるし、四万十川の水質の向上も考えられるので、そういう点でも非常に良い産業と考えている。是非シイタケ産業の振興をお願いしたい。また、人材の育成ということで、専門知識を有する指導者を、町やJAで育成していただければ、さらにシイタケ産業の振興に役立つと思うので、お願いしたい。

知事：シイタケは有望であると思う。中山間地域で、高齢者の方々が現金収入を得られるような作物づくりを一生懸命考えている。中山間対策として、今年の予算で力を入れたのは、まず生活を守るということで、水の確保と足の確保である。この次として、何とか暮らしていけるといことに踏み込んでいきたいと考えている。そんなに手間がかからないが、それなりにグラム当たりの単価が高いといったものがないか探している。薬草はどうか、鶏はどうかと研究を進めているが、今お話を伺って、シイタケもいけそうだなと思ったので、勉強をさせていただきたいと思う。

【様々な販売方法、家族を増やす対策、レンタルハウス事業の継続、農作業の雇用関係】

Cさん：JA四万十のニラ部会のCです。今、重油を始めとして、生産資材の高騰など、本当に農家は大変な時期になっている。しかし、そうは言っても、やめるわけにはいかないので、前向きに一生懸命やるしかないと考えている。部会員が100名いるが、今考えているのは、ニラ農家全員の所得の向上と、経営の安定である。部会として、まだまだ伸びる要素があると思うので、少しでも可能性があれば、企画して事業に入れたいと考えている。JA四万十の管内の園芸では、特に興津地区が歴史も実績もものすごいものがある。今、ニラ部会は、全く興津地区には及ばないが、何とか勉強して、興津に追い付け追い越せと、頑張っていきたいと思う。現在の販売高は7億円強であるが、販売高10億円に向けて頑張ろうということで、先日決起大会を行ったところだった。部会を元気にして、そして産地が元気になると、地域も元気になるのではないかと頑張っているところである。

今後について、県の取り組みにもある、園芸連の強化、今まで以上に品物を集中して、強い販売力で流通を進めて、これからも頑張ってもらいたいところだが、昔からやっていることをそのまま続けるのではなく、いろいろな方向性を考えてもらいたいと思う。私は、ニラの栽培でも、特別栽培、5割減農薬の認証をもらってやっているが、そういった作物、いろいろな作物がこれからの時代には求められている。それに対応できる販売方法も考えてもらいたい。

また、高齢化も後継者不足もあるが、もう一つ、私はよく農家を巡回するが、嫁さんがいない農家が多い。一人で作業をしている。嫁さんがいない、子どもがいない、家族が少ないということは、欲も出てこない、仕事に熱も入らないと思う。家族が増えて、子どもができて、労働の意欲がわいてくると思うので、そういったことも考えていかないといけないと思う。

それから、経営の安定のために、特にニラの場合は、ある程度面積がないと経営が成り立たない。新規就農も含めて、今後もレンタルハウス事業を続けていってもらいたいと思う。

最後に、農作業の雇用の関係について、なかなか家族労働だけではできないので、雇用関係についても考えていかないと経営の安定に結びつかないのではないかとと思う。

知事：5割減農薬をやっておられて、これに対応した売り方を考えるべきとおっしゃったが、よ

り具体的にはどうということですか。

Cさん：現在、園芸連の考え方は、市場に出すにはロットが必要であるということである。園芸連で一つに集めて売りたいという考え方が当然出てくる。それを今やっているが、これからは、それ一本ではだめだと思う。作物には、5割減や、エコ栽培や、環境保全型といったものがある。いろいろあるので、それぞれのニーズに応じて流通も考えていかなければいけないのではないかと意味である。

知事：産業成長戦略の農業分野では、品目別にそれぞれ戦略をつくっているのだから、ホームページなども是非ご覧いただきたいと思う。これまでの県の計画は、生産をどうするかということに軸を置いたものが多かったと思うが、今回の産業成長戦略の特徴として、販売をどうすべきか、流通をどうすべきかということにかなり重きを置いて計画を策定しているということがある。産業の振興を図るためには、収入を上げていかなければいけない。なので、販売をどうするかを考えないといけないということに重きを置いている。今おっしゃったとおり、県が汗をかいて園芸連さんとも一緒にやらせていただきながら、園芸連さんもまた新しい取り組みにチャレンジしていただきたいと思っている。そのときに、園芸連さんなどを中心として、流通段階でまとまっていった方がいいと思うが、そこから先の売り先については、品物に応じていろいろなポートフォリオを持っておくことが大切だと思う。そういう工夫を、県が園芸連さんなどとも一緒に汗をかきながらやらせていただきたいと思っているところである。

レンタルハウスについては、もっと拡充していきたくて思っている。担い手をつくるということが重要で、このままでは、10年後に強みが強みでなくなってしまうので、しっかりやりたいと思う。

最後に、家族を増やすという話だが、皆さんが会うための場を公的にも用意していかないといけないのではないかと議論を始めているところである。全県内を視野に入れながらそういうことを考えないといけないと思っている。

【地域での暮らし】

Dさん：私は窪川牛という牛肉を生産している。目立ってわいわいと若者が元気で騒ぐということで、地酒クラブというものも昔やっていた。また、4Hクラブとして、heart、head、health、handの4つが1つになって何かをやろうということもやっていて、商工会青年部と交流をして、自分たちが作ったものを販売していた。高知県はお祭りが多いと思う。四万十町でも毎週のように、金太郎夜市やお祭りがあって、そこで自分たちの作ったものを販売している。窪川牛は、町内では通常食べられないが、自分たちの作ったお肉は食べてもらいたい、食べている人の顔を見て、おいしいと言ってもらいたい。それがすごく自分たちの仕事の活力になる。BSEのときにはお客さんからいろいろ言われたが、一言の「おいしい」、「ありがとう」、「また頑張ってるね」という言葉を聞けば、帰ってきてから、牛の顔を見る目が全然違って来る。「かわいそうじゃない？」とよく言われるが、血になって、体の源になるので、それはかわいそうではない。残さずにきれいに食べることが供養であって、素晴らしいことである。お客さんの「おいしい」という顔を見たいという思いで、ポリシーを持って仕事もやらせていただいている。知

事さんのお話で、教育の話などがあつたが、そのとおりだと思う。すぐに教育が良くなるというのは難しいと思うが、自分たち親が精一杯走っていたら、子どもは見ている。ポリシーを持って仕事をし、自分のやっていることを心から語れば、先ほどお話もあつたが、奥さんも来ると思う。今、若い連中がたくさんいるが、定職に就いていない。力もやりたいこともいっぱい有り余っているので、何か方向性を見つけてほしいなと思っている。生まれ故郷が好きだから出て行かないが、どうしても仕事がないというのがあるので、ポリシーを持ってできる仕事と、あと生きがいを持ってほしいなと思う。

知事：私は好きな食べ物は焼き肉で、窪川牛も大好きで、食べさせていただいている。ありがとうございます。

地酒クラブや4Hクラブのお話をされたが、確かに高知県はお祭りが多い。お祭りに限らずだが、地域の若い方々同士で、イベントなどを活発にやって、子どもも高齢者の方々も巻き込んで、にぎわいをつくっていくために、若いDさんみたいな人に先頭に立ってやっていただきたいと思う。さらに、その上で、先ほど地産外商と申し上げたが、観光では、地産外商は、県外の人に来てもらうということになる。1個1個のイベントから、是非県外の人に来てもらえるような仕組みに、段々ビジネスにしていっていただきたい。ビジネスにということになってくると、いわゆる「4定」、定時、定性、定価格、定品質といったことが必要になってきて、もう一段の難しさが出てくるかもしれないが、地域で人々が暮らせる、地域の産業となるようなものを目指して、周りの若い人たちを巻き込んで是非頑張りたいと思うので、ご活躍をお祈りしたい。

【シイラの消費拡大・加工の取り組み】

Eさん：興津でシイラ巻き網漁業をやっているEです。知事さんも既にご存知だと思うが、浜の魚の値段が安く、今回の燃料高騰に伴って、漁業者も漁協も経営に苦しんでいる。漁業の後継者も育たず、漁師は高齢化している。こんな状況に不安を大きくしていたところに、役場、中央漁業指導所から、「自分たちが行動を起こすべきではないか」と強く言われたこともあって、漁師仲間が漁協と一緒にシイラの消費拡大イベントや、加工場の視察、勉強会を行ってきた。そして、今年10月にシイラ漁師が中心となった興津漁協四万十マヒマヒグループを結成して、みんなで出資をして活動を始めたところである。まだ、結成して1か月と少しであるが、保健所の営業許可も取って、自分たちで加工して、販売活動を行ってきた。短い活動の結果として、グループがシイラを買うことで、平均100円のシイラを、200円、300円と、浜の値段を上げることができた。また、シイラを加工すると、最高で1,000円くらいの値段になることが分かってきた。加工作業には、グループ以外の漁師も協力してくれるので、この活動を始めて本当に良かったと思う。来年度は、この活動をもっと大きくしたいと考えているので、役場に加工施設の整備をお願いしているところである。この実現のためには、自分たちがもっと努力をしていくことや、人も雇っていくことなど、いろいろなことを話し合っているところである。私たちが短い間にこんなことができたのは、イベントの手伝いや、加工場の視察のためにバスを出してくれた町役場の大きな力がある。私の記憶では、これほど役場が力を入れてくれたことはなかったと思う。これは、自分たちが前向きに動けばたくさんの応援が受けられるということ

だろうと思う。県でも、産業振興計画が策定されていると聞いているので、知事さんに一つお願いしたいと思う。それは、私たちと一緒にあって、一生懸命になってくれた町役場と私たち生産者に対して、県の方からも力強い応援をいただきたいということである。

知事：今のシイラのお話、正にそういうことこそ、高知の一つの活路ではないかと思っている。答えから言わせていただくと、我々も一緒にあって取り組みをさせていただきたいと思う。シイラを加工したら1,000円にもなるということだが、何に加工をするとそうなりますか。

Eさん：シイラをすり身にして、野菜などを入れて、惣菜を作っている。

知事：食品加工は、値を上げるし、遠くまで持って行けて、商圈も広がってくるので、目指す分野だと思う。この間、県議会で議論が出たが、生のミョウガをそのまま3つでパックにして売ると80円だそうである。ところが、大阪の空港で、ミョウガ3つを漬物にしたものが1パック400円で売られていたそうである。加工していくことで、一定値段が上げられる。ただし、ありきたりの加工になってはいけなくて、消費者目線で厳しくチェックするということは必要であろうと思う。そのためのテストマーケティングなどについて、県はアンテナショップを東京に設けようとしているので、その場を是非お使いいただきたいと思う。本当に素晴らしいお話だと思うので、頑張ってください。

~休憩~

【四万十ブランドの活用と保全】

Fさん：私はIターン者で、こちらに来て10年近くになる。一般的には、サラリーマンをやっていて、農業がしたいというので、こちらに来るといのがIターンの王道みたいな感じがあるが、私の場合は、少し変わっていて、既に8年間有機農業をやっていた。そのため、新規就農者のIターンの方が一番困る、生産した物を売っていく方法について、流通団体や宅配会社などのいろいろな方と既にネットワークがあったので、全くそういう心配がなくこちらにやってきた。有機農業という発想で動き始めてから、20年経つわけだが、こちらに来て、外からの目として思ったのは、四万十川という、世界的と言ってもいい環境のシンボルのようなものがあるこの地域で、四万十ブランドが活かされていないというか、四万十川があまり大事にされていない感じがするということである。景観も水質も大事にされていなくて、多分、今、気付き始めたところなのかなと感じている。引き続き自分も、この地域の環境の保全といったことに、あまり急がずに、地道に関わっていきたいと思っている。我々が作っている物は、そういう地域で育った背景がある有機農産物ということになるわけだが、その背景があるから売れると言ってもいいと思う。どんな作物、商品でもそうだが、必ず2番手、3番手が出てくる。そうになると、今度は価格競争になり、物流コストのかかる地域だと一気に弱くなるという繰り返しが起こる。そういうことを念頭に置いて、価格などに左右されないような、別の価値観の面から、四万十町を含めた高知県全体がどのように生き延びていくかを考えていかなければいけないのではないかと思う。

10年くらい前に出てきた定年帰農という言葉があるが、これは、団塊の世代の定年に合わせて農に帰るといふ志向が出てくるだろうということである。それに対して、青年帰農という言葉がある。定年帰農は、ある程度お金を持って退職金を持って、余生を過ごすというか、空気のいいところ、環境のいいところで、農的暮らしをしようというIターンで、青年帰農の方は、実際に結婚をして、子どもを育てていくという、現役の新規就農Iターンである。両方ともありで、両方とも受け入れていく方針が必要だと思っているが、難しいのは、精力的に生産して、販売をして、生活をしていく有機農業の方で、実際に食べていける有機農業を実現して、有機農業の未来を見えるものにしていきたいと考えている。

有機農産物を販売していくときに、地域、背景が大事なので、様々な地域の問題などにも取り組んでいかざるを得ない状況で、放課後子ども教室、学童保育にも取り組んでいるところである。また、これまで、地域貢献として、グリーンツーリズムの冊子やアユのパンフレットなどを作ったりして、環境の啓蒙も行っている。

知事：四万十地域で育った有機農業、農産物であるという背景が大事だというお話をされたが、そのとおりだと思う。2番手、3番手が出てきたときに、物流コストがすごくかかる本県みたいなところは不利だというお話があったが、本当にそのことを深刻に考えて、10年後をにらんでいながら準備を進めていくという姿勢が重要だと思っている。冒頭に少し申し上げたが、本県は園芸作物に強みのある県で、日本でも一時はナンバーワンくらいだったと思う。しかし、この間、勉強で東京のスーパーに行ったところ、生鮮農産物の売り場は、もうほとんどが千葉県産、茨城県産、長野県産、静岡県産で占められていて、高知県産はナスしかなかった。実際に農業の産出額は、千葉県が全国第3位、茨城県が全国第4位、本県は全国第32位である。技術力はまだ高知にかなわないにしても、首都圏に近いところが、その地理的な特性を活かして後から追い付いてきて、今や彼らの方が大きくなってしまっているということだと思う。追い付かれるということをにらみながら、新しい技術を開発していかないといけない。高知県は、IPMなどを使って、減農薬の農業をやっているが、これもそのうち他県が追い付いてくるだろうと思う。そうなったときに、有機農業を次世代のスターとすべく、県もようやく本腰を入れて取り組んでいこう、力を入れようと思っているところである。残念ながら、有機農業は、誰でもできるというところまで、技術が汎用化していないのではないかと思う。技術者の方によって、それぞれ流派がある。もっと多くの方が取り組めるような仕組みづくり、言葉は悪いかもしれないが、マニュアル化といったことが今後必要になってくるのかなと思っている。その上で、四万十地域での有機農業といった、他では絶対に真似することができない唯一絶対のものをもち続けるということに努力をしないといけないと思う。その点、高知県には四万十川があって本当に幸いだと思う。四万十川は、他の県は絶対に持つことができないので、この四万十川を大切に、その地域での有機農産物だという打ち出し方をしていくという戦略は、とるべき戦略ではないかと思っている。四万十川を始めとして、仁淀川や安田川や奈半利川などもそうだが、清流を保全する取り組みについて、県にしても、さらに言えば、国にしても、もう一段、二段、踏み込んでいく必要があるのではないかと思っている。特に高知県のように、清流を売りにしている県はそのことに意を用いないといけないのではないかと思う。高知県内では、特に東部で濁水の問題が非常に大きい。透明度を保つという観点からの清流を

守る取り組みも必要になってくると思うし、さらに、単に水がきれいというだけではなくて、川にたくさん生き物が住んでいるという、川を滋味豊かにする取り組みに一步足を踏み出していかないといけないのではないかとということも最近思っている。工事の仕方でも、自然工法という技術もできてきたり、ちょっとした石の置き方の工夫で、水温が変わって川に魚が戻ってくるようになったりということもあるそうである。私は、国の国土計画審議会の委員になった。これは国全体のいろいろなインフラ整備などを話し合う審議会だが、この間、四国のブロック会議で、清流の保全ということについて、本格的に取り組んでみる必要があるのではないかと問題提起をしたところである。単に治水や利水というものを超えた清流を大切にすること、これは新しい課題ではないかと訴えたところだった。今後もそういうところに力を入れてやっていきたいと思っている。

教育関係については、Fさんのような方に見ていただく、そういうものを全県内に広めていきたいと思っている。特に高知市内などでは、そういう取り組みが求められていると思う。共働き世帯が多い中で、切実な声が最近上がってきている。子どもたちの放課後の教育の場が、十分確保されているだろうか、塾に行かない人でも、勉強ができる場を用意していけないだろうか、もっと言えば、中学校でもできないか、そういうことに取り組もうとしている。

【十和地域での取り組み】

Gさん：私は東京から来て、旧十和村に住んでいる。ここの有機農業の素晴らしさにひかれて来たので、それをどう世間に広めていくか、自分がここに来させてもらった恩返しはどうやってできるか、手探りで動いている最中である。先ほどFさんのお話にもあったが、地域には宝物がたくさんあるのに、それを活かすことができていないということを毎日のように感じている。まだまだ勉強して、野菜だけではなく、よい加工品も作っていきたいと思っている。私は外から来た人間なので、やることが周りの方から見たら珍しいようで、珍しいことをやっている人は遠巻きに見られるところがあって、そこが難しいなとも実際感じている。オーガニックオカミーズというグループは、十和に前からある、おかみさん市の加工部の1グループだが、道の駅とおわのバイキングをやる際に立ち上がったグループである。自分たちが作った野菜をできるだけ使って、お金の勘定をし、利益を上げるという考え方がなかなか浸透しなかった。現在も儲けはほとんどない。それでも、今もずっと続けているという現状があって、私は正直言って、もうバイキングはそろそろ止めて次のことを考えたらと言っているが、1回始めたらやめるわけにはいかないという方が結構いらっしゃる。しんどい思いばかりして、お金もなかなか入ってこないのに、どうして違う方法を考えてみようというふうにならないのかなと毎日思っている。また、道の駅を立ち上げるときに、管理運営委員会のメンバーにも入れていただいたが、行政の方にはもっと専門のことを深く勉強していただきたいと思った。初めてこういう地域に来て、行政の方と嫌でも関わらざるを得ない場面がとて増えたが、そういうことをよく思う。

知事：道の駅とおわは、高知県の中でも最も有名な道の駅の一つだと思う。私も何度かお伺いさせていただいたが、店が清潔で、いろいろな地域の特産物を置いておられて、さらに外に抜けて出て行くと、円卓のようなものを置いておられて、あそこから見る四万十川の景色は素晴ら

しいと思う。レストランには、まだ残念ながら入らせていただいたことはないが、多くの人から評判をお聞きしていて、大変ご好評だと思う。経営的に難しいところもおありかもしれないが、ある意味理想の道の駅ではないかと思う。直接物販で地域の産物を売るということに加えて、自然を見せて、さらに地域のものをこうやって食べるんですよということを見せていくことができる。観光の発信と食文化の発信ができています。そういう結節点として素晴らしいところだと思うので、是非とも頑張ってくださいと思う。

ここから先は、高知県内全体の話だが、道の駅を今後いろいろな意味で活かしていきたいと思っている。地産地消の推進という観点や、県外から来られた観光客の皆様方に対する施設という観点もある。地産地消の点では、物販、直販というのは、県内全体で見ると、やや飽和状態になりつつあるのかなと思う。しかしながら、今後、業務筋などに、道の駅からダイレクトに売っていくような道筋がないかについても模索をしていきたいと思っている。もう一つ、観光の点では、観光客の皆さんに来ていただいても、お金を使う場所がないという観光地が結構高知には多いのではないかと思う。なので、道の駅などで、観光客の皆様にご休憩していただき、そこでいろいろ食べていただいたり、おみやげを買っていただいたりして、お金を落としていただく。先ほど、産業界の連携が弱いと申し上げたが、実は高知県は、観光客の方々に来ていただいて、落としていただくお金がすごく少ない県である。一人当たり2万4千円くらいしかない。これをもっと上げていかないといけない。食べ物がおいしいところナンバーワンと言われたことがあるのに、これは機会的にすごくもったいないことだと思う。道の駅などを、いろいろな結節点として、観光客の皆様楽しんでいただけるようなところにしていくお取り組みを我々ももっとバックアップさせていただきたいと思っている。行政の関係については、我々も日々精進を重ねているので、今後ご協力とご指導をよろしくお願ひしたい。

【地域の全国への発信、大正美人の会の取り組み、荒川修作氏の構想】

Hさん：私のところでは無農薬のお酒を作っている。おかげさまで全国ネットになっているお酒があって、この小さい町で、全国に発信する商品があるというのは、本当に自慢してもらっていいと思うが、地域の方もまだそこまでは思いがないようである。お店には、毎日全国からお客様がいらっしゃるが、そのお客様がどこにも寄らずにうちのお酒だけを買ってお帰りになるという状況があって、すごくもったいなく思う。お客様から、「四万十のアユ、ウナギを食べたいが、どこに行ったらいいだろうか」と聞かれても、それをご案内する場所がない。先ほど知事さんがおっしゃったように、いろいろなところにつなげられればいいと思うが、すごくもったいなく思っている。自分のところは蔵元だが、自分のところだけではなくて、高知県のお酒を全部扱っているお店をやっていて、高知の地酒を発信する仕事をずっとさせていただいている。高知県のお酒を全部詰め合わせた酒の皿鉢というものを作っていて、その中に「土佐癒しの旅」という本も入れているが、これからの観光はこういうふうになると思う。今は一段で詰めているが、次は、それを二段重ねにして、高知の地酒と、その蔵元さんのある地域の地産地消の商品をバックにして、お重みたいにして発信したらいいのではないかなとずっと夢を持っている。そんなことも是非実現していきたいと思う。

また、今は大正美人の会というものもやっている。27日には、NHKの「生活ほっとモーニング」という番組の取材がある。リポーターさんが大正駅に降りられて、メンバーがやってい

るコーラスを聞いて、下津井の方のモミジを見て歩くというシチュエーションになっている。それは、全国放送なので、大正町が全国で紹介されることになると思う。「花・人・土佐であい博」にも関わらせていただいている、美人の会でやっていこうということになっている。明日は窪川の松葉川に巨木を見に行く。来年は、十和をテーマにやってもらおうとっていて、3年目には、海洋堂さんのホビー館がちょうど立ち上がると思うので、大正の打井川をテーマにやらせてもらいたいと思っている。他には、十和のこいのぼり(の川渡し)と大正のあゆのぼりをくっつけて発信したいとっていて、去年から、あゆのぼりを地元の小学生や四万十高校生に作ってもらって、それをどんどん町中に増やして、観光の資源にしたいと思っている。そして、ヤイロチョウが四万十町の鳥である。それで、8月16日をヤイロの日と決めて、3年前から、8月16日前後にこの町においでたら、816円コーナーがありますよということをやっている。うちのものも、その日には、2,500円のお酒が816円で買える。これを四万十町全域に是非広げてもらいたいと思って、皆さんを口説いているが、今のところ大正町の一部でしかそのブームが起こっていない。家具屋さんだったら、81,600円にするとか、ヤイロ袋を作って、何点か組み合わせて816円とか、いろいろな方法を考えてヤイロを発信してもらえばいいなと思っている。

海洋堂さんのことは、Iさんが話す、荒川修作さんというニューヨークにいらっしゃる建築家の方が四万十町にお見えになって、荒川さんのすごい構想が高知県でおころうとしている。山本広明さんの主導で、10人ぐらいの県議さんが勉強会を始めてくださった。荒川さんの構想は、宇宙のような世界なので、普通の人聞いても多分分からないと思うが、この構想が高知県でできれば、本当に世界から注目を集めるような素晴らしいことが動き始めると思う。知事さんがやるぞとおっしゃってくだされば、明日から始まるのではないかと思う。

知事：評価が高くて、全国に発信しておられるお酒で、素晴らしい発信力だと思う。是非もっと発展されますようにお祈りしたいと思う。地酒の皿鉢についても、素晴らしいグッドアイデアで、それに最近「土佐癒しの旅」も一緒に入れておられるということで、お酒も全県内のものを発信される、さらにそれに加えてグリーンツーリズム、ブルーツーリズムというものを発信されるというように、複合的に組み合わせて発信されていかれるということは、学ぶべきところだと思う。素晴らしいことなので、是非頑張ってくださいと思う。

海洋堂さんのお話は次のIさんからお話しいただくということだが、荒川修作さんのお話も、山本広明県議にもいろいろ教えていただいたりしているところである。よく勉強させてもらいたいと思う。

Hさん：荒川修作さんも、是非高知でやりたいという夢がありなあって、みんなで行って頭を下げてお願いしてもいい話だと思うが、それを「是非高知で」とおっしゃってくださって、こんなチャンスはないと思う。よろしくお祈りしたい。

【県道55号大方大正線の改良、宗教法人の設立、JRのダイヤ】

Iさん：馬之助神社がある中打井川集落は、戸数が13戸の小さな集落である。平成18年、大阪府門真市にある大手フィギュアメーカーの海洋堂さんが、馬之助神社の大規模な再建計画を打

ち出された。宮脇館長のお父さんが馬之助神社の祠を寄贈したという縁で、宮脇館長も第二のふるさとと思っておられるようである。馬之助神社は、中打井川集落が管理しているが、この再建計画について、集落で慎重に協議をしてきた。その結果、この再建計画を地域活性化の起爆剤にするために、全面的に集落も協力することにして、受け入れることにした。また、現在、休校になっている打井川小学校を活用して、海洋堂がフィギュアホビー館を建設する構想が出されて、これについても、地域でいろいろと協議してきた。打井川地域全体でこの計画に全面的に協力することで、意思統一が図られたところである。打井川には、口打井川、中打井川、奥打井川と3集落があるが、この3集落が一つになって、打井川地域づくり委員会を組織して、馬之助神社を基本とした地域の活性化を図る計画をしているところである。ホビー館が完成すると、宮脇館長がおっしゃるには、年間25万人の観光客が来てくれるということである。県道55号大方大正線を通ってホビー館までは5kmあって、半分くらいは2車線になっているが、残りの半分は大型バスやマイカーで来られても大変通りづらい現状である。できることなら、早急に1.5車線に拡張していただきたいと思う。もう一つは、政教分離の形になるが、県の法務課に、馬之助神社の宗教法人の設立に際し、認証申請をしている。急いでいると思うので、なるべく早く宗教法人の認可をしていただきたい。

知事：海洋堂さんは、東京ビッグサイトを満杯にするくらい人を集める発信力のあるところで、全国的に有名なところであり、ホビー館の構想はすごいと思う。私も、「海洋堂の宝島」展に行かせていただいたが、今にも動き出しそうで、本当に躍動感のある、生き活きとしたフィギュアを作られる。この地にホビー館ができると、全国的なフィギュアのファンの皆さんが、かなりおいでになることになると思う。まちづくり、地域おこしという観点で素晴らしいとっていて、県としても期待をしている。道路の話については、町長さんから厳しく言われていて、限られた予算の中なので、いきなりすぐというわけにはいかない部分もあると思うが、いずれにしても、開館したときに大型バスが通れるようにしないといけないというのは、おっしゃるとおりだと思うので、そういう方向で話をさせていただきたいと思う。宗教法人の話については、規則に従ってやっていく必要があり、法務課が粛々と行っていくこととなる。

Iさん：もう1点、JRを利用して来られる方について、窪川駅からホビー館まで、あるいは打井川駅からホビー館まで、どういう形で行くか。予土線については、現在は、学生の通学のため（のダイヤ）みたいな感じだが、打井川まで観光客が来てくれるということになると、予土線の存続にも関わるのではないかと思う。

知事：そうですね。（県道大方大正線の改良は）まだ長い区間が残っていて、我々も限られた予算の中で苦労したり、一部、用地（買収）が困難だったりしているが、ホビー館が十分効果を発揮できるように、我々としてもできる限りのことをやりたいと思う。

【若者が地域に残るための施策、農業の企業化の取り組み、ブロードバンドの整備、窪川高校へのエール】

Jさん：教育について話し始めると、とても時間が足りないが、その中で、学力の向上について

は大変厳しい状況であると思う。これはずばり、家庭学習で、家庭の力を借りなければできないことだと思う。家庭学習の大切さは、学校でも生徒たちにも教えてもらっているが、私自身も本当に家庭学習の大切さを感じている。今日は高校で文化祭があって、昨日の新聞に13万枚の色紙で描かれたプロゴルファーの石川遼くんのもザイク画が出ていたと思うが、生徒たちもいきいきと元気に学び、遊び、一生懸命学校に通っている。窪川高校には、今年は3年生が40名強いるが、現在のところ、四万十町内に就職が決まったりというように、残る子がいない。進学をする子も、就職をする子も、高知県内に残ってくれればいいのだが、県外にどうしても流れていっているという実態である。この四万十町は、食と文化と自然があふれた、県内でも素晴らしいところだと思っている。そういった中で、若者がいないと、お世話になってきた高齢者の方々たちを支えることができない。農業も林業も素晴らしい中で、若者たちをいかにこの四万十町に残すか、知事がサラリーマンとしての農業ということを書いておられたが、私も農業を活かして企業化をするといった取り組みができないかと考えていたところで、県でも、ご指導、また、何か方法はないかというところをお願いしたい。また、窪川高校には農業コースがあって、シクラメンなどを栽培している。非常にそれが好評で、今日の文化祭にもたくさんの方に来ていただいたが、子どもたちが1回都会に出て行っても帰ってくるができる環境づくりについてのアドバイスや、県のお力添えをいただけたら非常にありがたい。

現在、四万十町ではケーブルテレビを進めていて、町中ではブロードバンド化の取り組みが進んでいるが、少し町中から外れると、高速でのインターネットができない状況である。若者の定住や移住に当たっては、ブロードバンドの整備によって、都会と同じレベルでの仕事や学習ができることが重要なポイントとなると思うので、そういう環境づくりに向けて、県の方もご協力をお願いしたいと思う。

知事：若者が、地域地域からもそうであるが、高知県からも出て行ってしまうという状況について、高校を卒業して、県外で就職をする人の割合が5年前は4人に1人だったが、19年3月の時点では52%と急激に増えている。県内の有効求人倍率が0.5ということで、仕事が少ない。この有効求人倍率が、全国では良くなっても、高知県ではこの5、6年間、全く良くならなかった。そこが大きな問題である。そうであるからこそ、冒頭お話ししたとおり、産業の振興のために、小手先の対応ではなくて、根本的な体質の強化が必要であると思っている。アクションプランづくりを、多くの方のお知恵を賜り、ご指導をいただきながら、行っているので、よろしくをお願いしたいと思う。

農業を活かす企業化の取り組みについては、そのとおりだと思う。農業大学の学生さんと話をさせていただいたときに、「僕は農業が大好きです。やりたいです。」という学生さんがいた。農業に触れてもらおうと、農業が好きになる方が多いみたいである。高校でそういう教育を進めたいということもあるが、「農業大学を卒業しても、僕は農家の息子ではなくて、土地が用意できないから、農業はできない。だから、JAさんか市場に勤める」という学生さんがいた。これは残念なことで、農業は参入障壁が高いということがある。まず、技術が難しい。そして、土地が必要で、地域とのつながりも大切である。農家の息子さんじゃないと、入るのが難しいというところがあるのではないかと思う。そういうときに、例えば農業生産法人などの仕組みを使って、最初は雇われる人として入って行って、そのうちに独立していくといった仕

組みができないかということ、新たな取り組みとして考え始めている。若者に農業に入ってもらえるように、何とかできないか、考えているところである。

インターネットの話だが、ブロードバンドの整備については、前田町長さんがご熱心に取り組んでおられて、厳しい財政状況だが、8月からこの整備を思い切ってやるというご決断をされたと伺っている。県も今年7月に、ささやかだが、国の補助と合わせて全体の補助率が2分の1程度になるという制度を創設して、これを加速したいと考えている。ブロードバンドは、教育でも利用できるし、また、高齢者の方々の見守りという点でも利用できる。さらに、直販という形で、商売をすることにもすごくいい。インターネットを使えば、全国に訴えかけていくことができる。高知県は、ブロードバンドの整備率が全国第47位である。しかし、本県のようなところこそ、必要なものであると思っているので、進めていきたいという思いである。

Jさん：中学校から高校に進学する際に、高知市内に流れる傾向が非常にあって、これについて窪川高校も対応を考えないといけないということで、中学校との連携など、いろいろと取り組みを行っている。PTAでも、開かれた学校の中でも意見を伺いながら、地域の方々にも入っていただいて進めているが、知事の方から、小規模校に対してエールを送っていただけたら非常にありがたい。

知事：地域の高校の魅力は、高校生になっても、元々の地域の皆さんと共に住み続けられるというところがすごく大きいと思う。親御さんと一緒に住める、親戚の皆さんと一緒に住める、その地域の里で暮らすことができるというのは、魅力だと思う。私が高校のときにも、寮に入って一人暮らしをしながら学校に通っている友人たちがいて、志を持って来ているわけだが、他方、寂しそうであったのもまた確かであった。高校についても、どこに行くかということについて、段々と自由度が高まっていく方向にあると思う。その中で、高校生を引きつけるという点から、地元の高校がいろいろな魅力的な取り組みをされるということについては、我々としてもバックアップしていきたいという思いがすごくある。高校を含めて、学校には、先ほどの道の駅ではないが、結節点のようなところがあるので、それを活かしていただいて、是非とも頑張っていっていただければと思う。

(会場の方からのご意見等)

【産地偽装等の事件について、部下の指導、農業と林業の活性化、公共施設への木の利用】

Kさん：今日の日本の情勢は大変なことになりつつあるように、テレビや新聞で見かける。このまま放っておけばどうなることかと考えている。高知県及び日本を良くするためには、まず自分は何のためにここにいるか、そこを確かめて実行に移す、人としての道を歩むことが大切だと思う。中国産のウナギを愛知県産といたりして、己の利益のために人をごまかし、真実が判明して謝罪をするという場面がたくさんある。

また、昔、教育委員会と先生に、教育問題であってはならないことがあった。それで大変な思いをしている。今後、知事さんも、それぞれの部下をしっかりと指導して、良い県づくり、国づくりをしていただきたい。

次に、高知県及び四万十町の活性化については、農業と林業において地域の活性はない。今、

日本の食料は外国から 60%を輸入して、外国のものを食べて生活している。こんなことがいつまでも続いたら日本はつぶれる。愛知県の方では、小麦を何百町と栽培している。働く場を設け、自分の食べ物は自分で作るということを基本にしてやってもらいたいと思う。

知事：人をごまかして己の利益を追求し、そして謝罪をする。去年の漢字は「偽」という字であったが、そういうことは恥ずかしいことだと本当に思う。正義が貫かれる世の中でないといけなくて私も思っている。私も政治家であるが、政治家は最もそうでなければならないと思っ

ているので、私もそのように心がけたいと思っ

ている。教育委員会の話については、私はどういうご事情が分からないが、私も県庁の職員もしっかりと襟を正して仕事をしていくことが大事だと思うので、いろいろとご指導いただきたい。農業と林業が大切だと本当にそう思う。漁業も大切であり、1次産業に高知県は強みがあるので、この1次産業を伸ばしていかないといけない。我々の持っている強みをいかに光り輝かせるかだと思っ

ている。食料自給率が 40%で、外国からの輸入に 60%も頼っている、これではだめだとおっしゃったが、食料自給率を確かに上げないといけない。そんなに簡単にはできないと思っ

たが、世界的に人口が増え、一方で砂漠化が進んで、耕地が少なくなっている。必ず、20年後、30年後に、外国から自由に食べ物を輸入できる時代ではなくなるはずで、大変な時代がやってくる。なので、自分たちで自分の食料を作るという方向に向いていかなければならない。そういうときに、本県のような、1次産業の強みのある県は有利だと思う。そのために、今から1次産業の振興に一生懸命取り組もうとしているところである。

Kさん：山間部にありながら、この建物には木を使っていない。ほとんど鉄とコンクリートの塊である。なるだけなら、木を使うということを考えてほしい。公共のものにはできるだけ木を使うように今後指導してもらいたい。

知事：おっしゃるとおりだと思っ

た。高知県では、公共施設で、昔は木があまり使われていなかった。しかし、今は段々と使うようになってい

すべての山林について整備をしなければならない。山林について、「緑のダム」の表現はよく聞かすが、「緑の砂漠」の表現については聞いたことがなかった。数年前の大学の公開講座の中だったと思うが、山林は外から見れば、緑のダムとして見えるが、一歩足を踏み入ると、そこは緑の砂漠であるという表現をされた。大変なショックを受けた。太陽光線がほとんど土の部分まで届かず、草の1本も生えていない状況であり、雨が降るために土が流され、石ころだらけになった山も見受けられるようになったと聞いた。私もときどき山に行く機会があるが、この話のように緑の砂漠の状況の山林を多く見る。ある方の話では、人類は今大変な経験をしていて、地球ができてから、山の表土が流出してなくなるという経験はしたことがない、山の土が流出してしまってからでは取り返しが見つからないということだった。昔は、山林に入ると、土の表面に広葉樹の落ち葉がたくさんあった。5 cm、10 cm、あるいはそれ以上の落ち葉の層が見受けられた。この部分に水がたくさん蓄えられていたものと思う。ちなみに落ち葉の層が1 cm できるのには10年かかると言われる。また、国においての計算もあると思うが、森林の価値は75兆円とも計算されている。高知県は広い県土、高い森林率からみて、県全体の森林環境の整備を行うことで、地球温暖化防止、CO₂削減について、相当の貢献ができるのではないかと考える。そこで、県においては、森林環境整備条例を制定していただき、また、市町村においても、森林環境整備条例を制定していただいて、基本理念、基本構想、基本計画、年次別計画を制定し、森林環境の整備をしていただきたい。国民が森林に期待している役割についてのアンケート結果では、災害防止がトップである。水源かん養、環境維持、大気汚染と続いて、木材生産に期待するのは、5番目くらいと非常に低いわけだが、この森林整備は四万十川の清流の保全にもつながるのでよろしく願いしたい。

2点目の、自然災害を防ぐための森林整備だが、森林の荒廃が進み、さらに放置していると、人に襲い掛かってくると教えてもらった。2001年に起きた高知県の西南豪雨もしかりとの話である。表土の土の流出が進んで、森林の下は昼間なお暗く、草も生えていないと、大雨で土石とともに木々が流出して、人を襲うことになる。災害防止の観点から森林の整備をお願いする。

最後に、林業の振興のための森林整備を行っていただきたい。木材価格が低迷しているが、外国では、森林を育てて数百年と生活をしてきた国でも、自分の国で育てた木材は、自分の国で消費するという考えになってきつつあると聞いた。高知県には、売るほど木材がある。しかし、木材を丸太のままでも売れない、木を売るには木の文化を売らないとだめだと教えてもらった。高知県の木で家が建てられるような仕組みを県で作っていただきたい。次に、大豊町に大手集成材メーカーさんが来られると聞いているが、これについて、四万十町の森林がどのように流れていくのか、四万十町への経済効果はどのように期待できるのかをお教えいただきたい。木質バイオマスのペレットは1キロ19円でできるというような話も聞いた。いずれにしても、産業振興については、産官学での取り組みをお願いしたい。高知大学においても、地元の方にお役に立ちたいというようなことが示されている。公開講座もいろいろやられているが、各市町村で公開講座が開設されて、いろいろなことを学ぶ機会が増えればよいと思う。木材が経済につながる仕組みをよろしく願いしたい。

知事：最初に、森林の環境のお話だが、間伐をもっと促進したいというのは私も同じ思いである。おっしゃるとおり、従来のスピードではスピードが足りない。森林環境税が今、2期目

になっている。前は適用できる区域を制限していたが、今回、制限を大幅に取っ払った。おそらく前に比べると、間伐のスピードは5倍から10倍くらいになるのではないかと期待している。ただ、これだけでもまだ足りないということで、例えば協働の森事業については、今34件締結しているので、こういうものを進めていきたいと思っている。また、間伐材を使うインセンティブをつけられるかどうか大きいと思う。最後のお話にも絡んでくるが、環境の観点から言うと、例えばバイオのチップなどを使うことでCO₂の排出量を減らし、その減らした排出量の証明をして、企業さんに買っていただく。いわば、国内排出権取引の走りみたいな話だが、年度内に企業さんと取引を結ばないかという取り組みを進めたりしている。スピードを速めなければならないが、そのためには財源がある。その財源をどう負担していくかという仕組みづくりをいろいろと講じていきたい。森林環境税に加えて、企業のCSR活動に訴えていって、お金を出していただくということも考えたいと思っている。

2点目、西南豪雨を含め、土石流が人を襲うという話だが、これも一体だと思う。森林の下草などがしっかり生え、土がしっかりと固まった山を作っていくということが大切なのだろうと思うので、森林の整備を通じてそういうことを進めていくことが必要だと思う。

林業の振興については、とにかく材価が低迷してきている。ただ、最近は輸入材についても、段々値が上がってきているということがあって、国産材に追い風がやや吹きつつあるのかなというのが大きな流れだと思う。丸太のままではなかなか大変だというのは、おっしゃったとおりかなと思うが、一つには、コストダウンをもっと図っていくために、森の工場づくりを一生懸命進めている。さらに、Aさんからもお話があったが、最終的な消費者側からの需要を盛り上げていくということも大切だろうと思う。売り方を工夫して、付加価値を付けて売っていくという取り組みが必要なのだろうと思うし、家に県産材の木をできるだけ使うということを広めていきたい。家を建てるのに県産材を使っただけならば、助成金が出るという制度があって、今、コマーシャルで宣伝も行っているが、そういう取り組みも含めて需要も増やしていきたいと思っている。企業誘致は、今一生懸命行っている。もし来ていただければ、製材能力があるところなので、全体として森から木が下りてくるようになると思う。それが、他の業者さんたちにもいい効果となり、いわば、森から市場に木が動き出すということになるのではないかとすごく期待感を持っている。ペレットの話については、ペレットだけを作ってもまだ赤字である。なので、用材は用材として売った上で、パークや枝葉などをペレットとして作って売っていくという体制ができなければいけない。そうしないと、本当の意味でうまくシステムが組めたということにはならないだろうと思う。用材の消費が増えれば、県内でも、ペレット工場が十分ペイするようになる可能性が出てくるのではないかと考えているので、そういうシステムを構築したいと思っているところである。企業誘致ができれば、そういうシステムの構築に大きく力を貸していただけることになるのではないかと考えている。

【四万十高校への生徒の確保】

Mさん：四万十高校のことについてお話ししたい。卒業生の流出ということだけではなくて、これからいかに生徒を集めるかということがその根本だと思う。今、四万十川の素晴らしさについては、皆さんからお話があった。もう一つ、四万十高校という、素晴らしい学校がある。ここは、環境コースを持った、西日本でも数件、全国でも数少ない学校である。四万十高校にな

ってまだ9年目と歴史が浅く、いわゆる進学や就業の実績がないため、環境コースを持っていながら、ここ数年間定員を割っている。最初の年は県外からたくさん生徒が来てくれたが、去年は定員ぎりぎり、県外生は1人もいないという状況にまでなってしまった。なぜかというと、四万十高校の特徴を活かせていないからである。環境を活かして、いかにここに人を呼ぶかということが重要である。県としても、交流人口を増やすということで、観光のことなども考えておられると思う。観光のお客さんは1泊2日、2泊3日だと思うが、四万十高校に生徒1人来ていただくと、3年泊3年1日である。しかも、本人だけではなくて、両親も、兄弟も、友だちもいて、すごい広がりになると思う。県も観光行政には力を入れて、たくさん予算を組んでやっていると思うが、そういった考え方を取り入れていただいて、生徒を呼ぶことに何とか予算がつかないかと思う。もう一つは、この四万十高校を企業と考える。通常の企業誘致で来ていただいた企業はものづくりをする。一方、四万十高校は人づくりをする。しかも、環境に絡んだ人づくりをする。企業誘致には、県も部署を作って、スタッフを用意して、予算を使ってやっているはずである。高校についても、人づくりの企業という考え方をして、何か支援をいただける方法はないか。とにかく、今の四万十高校は、こんな素晴らしい環境の中であって、環境コースを持っていて、全国にも珍しい学校なのにもったいないと思う。これを何とか活かして、四万十高校に人を呼び、地域の活性化につなげていけないかなと思う。

知事：環境コースのことについては知らなかったもので、帰ってまた勉強してみたいと思う。実は、私、昨日、予算の準備などもあって、夜中の12時半くらいまで中澤教育長と一緒にいた。教育長は、今後、いかに地域地域の高校の特色づくりをしていくか、そのために県の教育委員会としてどういうことができるかを考えると言っていた。それをしないといけない。地域での定着ということもあるが、段々と進学の重要度が高まってきている中でそういうことが是非とも必要だと考えている。環境コース特有の話については、勉強不足なので、今お答えができないが、教育長にも話をして、地域の高校の特色づくり、魅力づくりについては、もっとやっていきたいと思う。

【高知県の振興策】

Nさん：知事は愛知の産業がなかなかすごいという話をされたと思うが、愛知に勝てるわけが全くないと思っている。その理由は時間をかけて別の日に言いたいと思うが、今日いただいた資料の中でも高知県のことを十分分析されていると思う。同じ市場経済の中で、同じ土俵に乗って勝負するのは全く無理だと思う。財政のパンフレットの5ページに、環境立県の推進と書かれている。唐突ではあるが、是非、環境立県、また、中米のコスタリカではないが、完全非武装、永世中立県を宣言していただければなと思っている。この冊子の表紙にその宣言を書き、そのあとに高知県の政策というくらいでもいいのではないかなと思っている。これは、他には負けない土俵、背景というものになって、発信できるのではないかなと思っている。是非知事の政治生命をかけて、そのくらいの思いでやっていただければなと思っている。これは別に返事はなくても結構で、知事の心に訴えかけて一石を投じて、心に留まってくれれば十分だと思っている。

知事：愛知に勝てるわけがないという話もあったが、私は愛知県タイプを高知県でやろうとしているわけでは決していない。愛知のモデルをやろうとしてもそれは無理である。愛知県の経済がなぜいいかというと、国内の市場がどんどん衰えている中で、愛知県は輸出で外に打って出ている。なので、愛知県は豊かである。我々が今からいきなり外国にとっても、一足飛びには難しい。だが、県内から外に打って出るといふ姿勢は、県内市場がどんどん小さくなっている中においては大切な姿勢ではないかなと思う。もう一つ、高知県はやはり1次産業や自然を活かした観光などを推進していかなければいけない。これは我々の強みを活かすということで、我々の生きていく道だと思ふ。工業中心の愛知県とは根本的に違ふ。我々はこれを高知モデルだと思ふ、頑張っていく必要があると思ふ。

【アユが捕れる四万十川に】

〇さん：先ほどから話が出ているが、四万十川に、ここ3年の間にアユがほとんどいなくなった。アユを何とか捕れる方法を考えていただけませんか。下流には四万十市、上流には四万十町、中間には四国電力がある。そういうところとも協力しながらやっていただきたい。友釣りファンは、全国にいる。そして、全国の皆さんが、一度四万十川にアユを釣りに来たいと思っている。是非四万十川にアユが返ってくるように、そして、返るまでに時間がかかるのであれば、何とか放流をもっと増やしていただくようにして、釣りファンを集めてほしい。

知事：四万十川流域の市町村にお伺いすると、皆さんにアユが少なくなったと言われる。その理由にはいろいろな説があって、水が濁ったからと言われたこともあったし、川の水の量が減ったとか、石の置き方が悪いと言われたこともあった。水の量については、降る雨が増えたり減ったりするので、その影響もあろうかと思ふ。さらに、四万十市に行ったときには、四万十のアオリがもうほとんど取れなくなってしまったという話も伺った。先ほども申し上げたが、川を肥やすというか、滋味豊かにするということは、新たな課題ではないかと思っているところで、そういう姿勢で仕事をさせていただきたいと思ふ。どういう手があるのか、相手が自然なので、なかなか特効薬がなく、大変なことだと思ふが、地道な努力を繰り返していきたいと思ふ。

(知事のまとめ)

遅い時間まで誠にありがとうございました。地域地域の事情は大変でいらっしゃると思ふが、今日は本当に前向きないいお話を伺った。地域の皆様が一生懸命取り組んでおられることによって、四万十町がどんどんよい町になっていかれるのではないかという期待を持っている。ただし、客観的な外部の情勢は非常に厳しい。そういうときだからこそ、私どもは、地域地域で頑張っておられる皆様方とともに、力を合わせてこの県を良くしていきたい、県勢を浮揚させたいと思っている。是非ともご指導、ご鞭撻を今度ともよろしくお願い申し上げます。

本日いただいたご意見については、個人情報に配慮して記録を作らせていただいて、関係部局にも話を回して、組織として共有させていただきたいと思ふ。決していただいたお話を聞きっぱなしにせず、いただいたご意見を県政に活かさせていただきたいと思ふ。